

第2節 後期 「共生と平和の科学」

中 村 明 彦・佐 藤 良 子
原 順 子・三小田 博 昭

【抄録】 後期の地球市民学は『共生と平和の科学』という講座名で授業実践をしている。「子どもの人権・ジェンダー・貧困と国際協力」の各グループで、学習内容を基に肯定側、否定側に別れてディベートを実施し、テーマに対する学びの深化と他のグループのテーマへの学びの共有を試みた。

【キーワード】 共生 平和 子どもの人権 ジェンダー 貧困 国際協力 ディベート

1. はじめに

『共生と平和の科学』は、現在起こっている地球上の諸問題を「子どもの人権」「ジェンダー」「貧困と国際協力」という具体的・多元的な視点から探究し、地球市民として解決に向けて自分たちに何ができるかを科学的に学ぶ講座である。本年度は各グループで、議論を肯定側、否定側に別れて議論するディベートの手法を取り入れた。このディベートにより各グループのテーマに対す

る学びを深くすること、他のグループの審査をすることで、議論の効果的な方法を学ぶことを試みた。

(1)育てる力として以下の4つをあげた。

；授業展開の表で利用

- A) 探究を通じてものごとの本質を深く理解する力
- B) 物事を論理的。多元的かつ長期的に考える力
- C) 自らの考えを他者に対して表現する力
- D) 問題を設定し、他者と協同して解決する力

2. 学習内容

1) 年間授業計画

テーマ			子どもの人権	ジェンダー	貧困と国際協力
内 容			子どもの人権に焦点をあて、世界の子たちを垣間見ながら自分たちの生活を振り返り替える。	ジェンダーの視点で、差異のある集団が共生していくには、どうすればよいかを考える。	「貧困」・「国際協力」という課題に向き合い、自分たちがやるべき協力活動を探る。
担 当			三小田・佐藤	原・佐藤	中村・佐藤
回数	月	日	導 入 (仮説をたてる)		
1	10	10	Knowing the Diversity (ものの見方)・評価の方法		
2		17	共生と平和の化学とは (佐藤先生)		
3		24	仮説に基づき情報処理能力の育成 (大谷教授)		
4		31			
5	11	7	担当教員のプレゼンテーション		
			展 開 (検証する)		
5	11	21	マインドマップによる仮説作成		
6	12	5	子どもの権利条約について	性差区分の変化	援助は誰のため何のため
7		12	幸せを測るものさし (合同)	海外TVから見えるもの	幸せを測るものさし (合同)
10	1	9	冬休み課題メディアリテラシー発表会		
11		16	効果的な援助とは①	ノルウェーの教科書	協力援助の気をつける点
			ま と め (考察する)		
14	1	23	効果的な援助とは②	AA/P Aの可能性	自分達のやりたい協力活動
15		30	各グループ ディベート準備①		
16	2	6	各グループ ディベート準備②集 録 作 成		
		10	SSH研究成果発表会 (ディベート大会)		

			集録原稿のまとめ・スピーチの準備
17		10	まとめのワーク スピーチ大会
18		16	集録綴じ・アンケート

【研究協議会でのディベートの様子】



（肯定側立論場面）



（否定側質疑場面）



【ディベートの展開】

時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価 （『育てる力』の項目）
3分	ディベート大会の確認	○各グループの役割分担や持ち物を確認する。	○自分の役割を確認させ、時間を守ることを伝える。
33分 発問	ディベート1 『ジェンダー』 グループ	○論題 「片方の性を優遇することは差別か」 1 立場を決める 2 肯定側立論 3 否定側質疑 4 否定側立論 5 肯定側質疑 6 否定側第1反駁 7 肯定側第1反駁 8 否定側第2反駁 9 肯定側第2反駁 10 審査 11 判定	【ディベーターへの評価】 ○グループで協同して進めているか観察して調べる。（CD） ○相手の主張を踏まえて議論しているか、発言を聞いて調べる。（AB） ○主張に一貫性があるかなど、フローシートにより判断する。（AB）
協同探求Ⅰ			
33分 発問	ディベート2 『貧困と国際協力』 グループ	○論題 「国際協力は日本にとってメリットがある」 ディベート1と同様に進行	【ジャッジへの評価】 ○公正に客観的に審査出来たかジャッジの判定を聞いて調べる。（AC）
協同探求Ⅱ			

33分 発問 協同探求Ⅲ	ディベート3 『子どもの人権』 グループ	○論題 「子どもの幸福はお金で決まるか」 ディベート1と同様に進行	【フロアーへの評価】
7分 個別探求Ⅰ	振り返り	○自分のディベートと他グループのディベートを振り返り、ワークシートに記入する。	○ワークシートを読み、それぞれの主張を読み取り、自分の意見を持つことが出来たか調べる（ABC）

3. ディベートに関する生徒の感想

(1)自分のグループのディベートに関して

- ・ディベートに対する意識が低かったと思いました。相手側の意見に対して納得のいくようなデータを示し反論することが難しく戸惑ってしまったので相手側と視点が揃わないこともあり、まとまりが無かったように感じました。分かりやすい論を展開することの大変さがわかりました。
- ・立論がしっかり自分達の理論ベースを説明し、反駁が論点を的確に整理し反応していく、そんな能力が必要だと思った。
- ・相手の主張を捉え、それを否定しながら自分の意見の正当性を強めることは、想像していたよりずっと難しく、また、とても緊張していて上手くまとめられなかったと振り返ります。
- ・沢山の資料を集め、事前に議論をし、準備は万全にしたつもりでした。実際その努力に相応するディベートの濃密さになったかと思われませんが、それと同時に、相手の理論に対する的確な反論の難しさと話の筋をつくる大切さを学びました。また、相手の質問を予測して反論を予め考えておくことが必要と感じました。
- ・それぞれのテーマについて深く考えることができました。普段身近なことであってもなかなか深くは考えることの無いものだったので良い機会になったと思います。否定側に立ちましたが、1つの問題についていろいろな方面から考える事ができました。テーマについて深くしれたことも大きなことでしたが、やはり、1つの事をいろいろな視点から見ることや論を組み立てる事などが印象に残りました。
- ・自分たちの考えてきたことが本番でうまく生かせなかった。しっかりとした柱を持てなかったと感じました。
- ・ディベートに於いて中心となる論題を見極めてそれに対する筋道だった議論を展開することに少し欠けいたと反省している。内容としては両者とも非常に細かく調べ上げられていて楽しい時間であった。

(2)他のグループから学んだ事

- ・双方とも立論から質問・反駁の流れがまとまっていて、論点も分かりやすかったと思いました。2つの

テーマについて知識が少ない私にも分かりやすい論であったと感じました。

- ・ジェンダーは、普段気づかぬうちに刷り込まれている差別意識、子どもの人権は精神的な満足と物質的な満足について学習していると感じた。
- ・3つのグループに於いて、討論しているのは人間の感覚的な内容であり実はどちらも判決をつけられないのが現実だと思いました。
- ・始めて他のグループの具体的な内容を知る形となりましたが、肯定側、否定側に立った議論を聞くことで、そのテーマに対するメリットとデメリットを簡潔に知ることができ、良い機会となりました。
- ・自分が正しいと自信を持って思っていたことも、ディベートをすることで客観的な視点を得ることができ、考え直すことができ良い機会になりました。
- ・他のグループは、きちんとした柱を持った上で、適宜判断しながら討論できたのではないかと思います。反駁に対しての反駁も筋（自分たちの主張）が通っているもので、興味深いディベートでした。
- ・具体的な活動内容とその先にある新しい発見という視点から、とても興味深い討論であった。

(3)共生と平和について：このディベートから

- ・誰にとっても平和な世の中をつくるのは難しい。特に、人々の間で差が広がるのが性・国のこと・年齢の話であると考えます。この差が縮まることで平和につながると思います。
- ・私たちが普段気づかぬうちに他人に害悪を及ぼしていないか「幸福」とは、「満足」とは、何かと言うことを普段社会で通じている価値観を否定してみることでみんなが幸せに暮らすために大切なことを見つけることだと思う。
- ・性差にしろ国際協力にしろ人権問題にしろ、私たちが生きていく上で避けられずどこかで誰かとぶつかる問題なのだと感じました。人とこうして意見をぶつけ合って討論する場は大切だと思いました。
- ・共生をする、上手く共生ができることが平和につながると思います。ここでいう平和とは世界的な平和であり、人間同士、友達同士での平和な関係にも繋がると思います。性差や国際的貧困の差、幸せの差が無くなることで平和に繋がると思います。
- ・人が差別されることなく「平等に暮らしていくために

重要なこと」を考えている点で平和に繋がるのではないかと思います。

- ・私は科学とはいっても覆されうるもの、根拠に裏付けられたものだと考えます。世界には様々な人・立場があり、その理解や平和はどの視点から考えるかによって大きく異なると思います。様々な境遇、いわゆる根拠によって価値観が生まれるため、共生して行くにはこれらを相互理解していくことが大切なものではないかと考えます。
- ・共生というものは、対性・対国・対金に関しては決着が付くとは思えないと感じました。これをうまく共存させていくことが平和につながる、どれかどちらか一方だけでは平和とは言わないのではないかと考えました。
- ・3つのテーマは、メディアリテラシーに基づく正しい知識を手に入れ、現代社会が抱える問題点を探求していくことにつながっていると考えます。
- ・将来を担う子どもの幸せ、世界の各国の協力、男性と女性に対する差別ものお題、いずれも「平和」という状態を目指すためには必ず出てくる問題だと思います。「子ども」という大人から見て年齢の差、異性に対する差、異国の文化の差を考えると、それを実行することが「平和」への第1歩だと思います。

4. 成果と課題

今回、SSH研究成果発表会という場で、公開授業を展開した。毎回このような研究発表に於いてどのようにまとめを発表させるかが問題となっている。「ディベート」という手法に関しては、生徒のみならず教員側も改めて学習することができた内容であった。

「ディベート」に向けての準備の必要性を生徒の感想にもでていたが、時間的な制約の中で既存の学習内容を基に賛成側・反対側の資料を準備した生徒の取り組み方に感心させられた。

3つのグループが独自に授業を展開しているため、他のグループがどのような内容を学んでいるかを学ぶ時間が、まとめのスピーチでしかなかった。今回ディベートを3つのグループを一緒に行うことで、ディベートを判定する側として参加することにより、別のグループの論議を通してテーマのメリットやデメリットが浮かび上がりスピーチ以上に他のグループのテーマを改めて学び直す機会となった。

また、「共生と平和の科学」という大テーマにたいして、生徒がどのようにまとめていくのか、今後の課題にしたい。

（文責 中村明彦）